大いなる秋田・東京公演

古里への思い一つ

浮かぶ情景、感動の涙

「一つになれた」「泣けた」―。東京・杉並公会堂で23日開かれた「大いなる秋田・東京公演」。首都圏在住の本県出身者ら165人が古里に対する熱い思いを胸にステージに立ち、約千人の聴衆で満員となった会場は、大きな感動と一体感に包まれた。

演奏されたのは石井歓作曲の「大いなる秋田」のほか、秋田市出身の天野正道さん作曲「交響組曲第7番『BR』より」、大仙市出身の後藤洋さん作曲「輝く日への前奏曲」の計3曲。

息の合った演奏と合唱。最も盛り上がったのは「大いなる秋田」だった。武蔵野合唱団も加わって声高らかに始まると、会場には涙を浮かべる人も。「鳥海山や田園風景などが目に浮かんできて、胸が熱くなった」。八王子市の原幸子さん(70)＝湯沢市出身＝は、約50年前に見た古里の情景がよみがえったという。

予定していた楽曲が終わっても、拍手が鳴りやまない。アンコールに応えて「大いなる秋田」が再演されると、観客も一緒に歌い会場が一つになった。

昨年2月に企画が持ち上がってから1年余。実行委員長を務めた湯沢高吹奏楽部OBの倉田京弥さん(46)＝都庁勤務＝は「こんなに大勢の人が集まるとは思わなかった。離れていても、みんな古里を思う気持ちは強いんだと実感した。やってよかった」と、晴れやかな表情を見せた。

都内の公民館などで12回の練習を重ねたメンバーたち。10～70代の幅広い年代が集まった。中には約25年ぶりに楽器に触れたという人も。大阪や北海道、本県から駆け付けた参加者もいた。

「秋田を愛する気持ちがあふれた」。秋田南高吹奏楽部OGでホルン奏者の村上奈々恵さん(25)＝大阪府、同級生でトロンボーンを吹いた淀川恵梨さん(25)＝東京都＝は、練習時から「何回も泣きそうになった」という。

「『大いなる秋田』は心に焼き付いている名曲」。ソプラノを歌った能代市出身の佐藤悦子さん(49)＝川崎市＝は、会場で涙を浮かべる年配者を見て、もらい泣きをこらえるのに必死だった。

「東京で秋田の関係者がこんなに集まり、楽曲を公演するということ自体がすごい。うれしくなった」。友人2人で訪れた都内在住の三浦明子さん(23)、斉藤志保さん(22)＝由利本荘市出身＝は口をそろえた。「秋田の人たちは団結力がある。素晴らしいですね」。埼玉県所沢市から訪れた夫妻がうらやましそうに話した。

（小川顕）

フィナーレを飾る「大いなる秋田」を合唱するメンバーたち＝杉並公会堂

300人、東京と一体感

秋田市で生中継

公演は、インターネット回線を利用して秋田市で生中継された。会場の秋田ビューホテルには約300人が訪れ、遠く離れた東京会場との一体感を味わった。

生中継を企画したのは秋田市のIT関連会社「アイネックス」。鎌田良勝社長によると、当初は定員を100人とする予定だったが、予想を大幅に上回る申し込みがあったため、急きょ会場を変更した。

「これも『大いなる秋田』という曲が持つ力だろう」と鎌田社長。

集まった約300人は、大型スクリーンで熱演を鑑賞。アンコールの場面では、東京会場と一緒に合唱し、一体感を味わった。終了後は、大画面に映し出された東京会場に向かって、盛んに拍手を送っていた。

秋田市新屋の30代の女性は「中学校の卒業式で『大いなる秋田』を歌ったので、当時の感動がよみがえった。東京会場と一体の感動を味わえた」と感激した様子。かつて湯沢市の女学校に通ったという秋田市の女性(81)は「第3楽章の県民歌は、女学校時代からの思い出の曲。素晴らしい演奏で心に染みた」と、しみじみ話した。

秋田会場の実行委員長を務めた石黒寿佐夫・秋田スズキ社長は「インターネット回線を用いた中継には不安もあったが、遠く離れた2会場で感動を共有できた。大成功だ。今後も県民と県出身者が協力し、秋田のために活動を続けたい」と話していた。

（嶋崎宏樹）

東京会場と一緒になって合唱する来場者＝秋田市のホテル